



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

51

ベロー

雨の王ヘンダソン 佐伯彰一訳

ウェルティ

デルタの結婚式 丸谷才一訳

中央公論社

ペロー

ウェルティ

訳者 佐伯 彰 一

丸 谷 才 一

HENDERSON THE RAIN KING

by Saul Bellow

DELTA WEDDING by Eudora Welty

Originally Copyrighted by each author,
Japanese language anthology rights
arranged through Russell and Volkening
Inc., New York and Charles E. Tuttle Co.
Inc., Tokyo.

昭和42年4月1日初版印刷

昭和42年4月10日初版発行

価 390 円

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

ペロー

雨の王ヘンダソン

3

ウエルテイ

デルタの結婚式

303

解説

年譜

572

590

雨の王ヘンダソン

どうしてこのアフリカ旅行をやらかす気になったのか？ 簡単に説明はできない。事態はますますひどくなって、そのうちに手のつけようもなくなってきた。

ぼくが五十五歳にして、アフリカ行き切符を買いこんだときの状態を思うと、いっさいが嘆きの種ならぬはない。もろもろの事実が群がり迫ってきて、まもなく胸は重苦しくなる。万事ごちやごちやと——両親も、妻も、女たちも、子供たちも、農場、動物、ぼくの習慣、金、音楽のレッスン、ぼくの酔態、偏見、野性、いや、歯も、顔も、魂までが入り乱れだした。叫ばざるをえないのだ。「いや、いや、退つとれ、ちくしょうめ、わしを放っておいてくれ！」と。だが、向こうだって、やすやすと放っておけるものじゃない。万事がぼくに所属する、ぼくのものなんだから。で、四方八方からなだれこんでくる混沌そのものだ。

もっとも、強力な圧迫者というほかない世界も、ぼくにその怒りをあびせかけるのは遠慮してくれた。ただ、

諸君にもわかってもらえるように、なぜアフリカへ出かけたかを説明しようとなると、事実に直面せざるをえない。で、金の話から始めようか。ぼくは金持だ。親父から相続したのが、税金を引いて三百万ドル。だが、自分では浮浪者なみと思っている、というのは、ぼくの振舞いは、まさしく浮浪者同然だ。事態がひどくなつてくると、何か助けになるものとは、ときどき本ものぞいてみたが、ある日、こんな文句にぶつかつた。「罪の宥しは恒久的なものであり、まず正しき行動が、要求されるのではない」この文句にひどく感心したので、口癖みたいにつぶやいてみていた。が、そのうち、どの本に出ているのか忘れてしまった。親父の残していった数千冊のうちのだれかには違いない。親父は自分でも何冊か本を書いた男だ。で、何十冊かひっくり返してみたが、出てくるものは金ばかり。というのは親父は紙幣を葉代わりに使う癖があり、ポケットにあるのを手当たりしだい、五ドル、十ドル、二十ドル、お構いなし。三十年前の、もう通用しない奴、あの大型の黄いろい紙幣まで出てきた。昔懐かしい気持も湧いてうれしくなってきたので、書斎に鍵をかけて、子供を入れないようにし、梯子に乗ったまま、本を振ってみては、紙幣を床に振り落として、午後をつぶしてしまった。ところが、例の「宥し」についての文句は、見つからずじまいだった。

次の話に移る。ぼくは、さる名門大学の出身——といっても、母校の名前をあげて、迷惑をかけるにも当たるまい。ぼくが、ヘンダソン一族ではなく、親父の息子ではなかったら、当然放校になっていたところだ。生まれるとき、十四ポンドあつて、そういう難産だった。それから、どんどん大きくなった。身長は六フィート四インチ。二百三十ポンドだ。ばかでかい頭に、ペルシャの羊毛みたいのが、もしやもしや生えている。疑ぐり深い目つきで、いつも目を細くしてにらんでいる。がなりたてる癖がある。鼻も大きい。兄弟は三人、ぼくだけが生き残った。父は、そんなぼくが癪にさわって、心穏やかならぬ氣持をいだきつづけていたらしい。ぼくも結婚となると、父親を喜ばせようと、同じ階級の出の女を選んだ。美人で、背が高く、エレガントで、引きしまった体つき、腕もすらりとして、金髪、控え目で、物静かで、しかも多産的。以上に付け加えて、分裂症だったといつても、向こうの一家から反駁のしようはないはずだ、それに違いはなかったのだから。ぼくのほうも氣違い扱いされているが、これもやむをえない——むら氣で、荒っぽく、わがままで、いやそれどころか氣も狂っているのかもしれない。子供の年から逆算してみると、二十年ぐらいいっしょに暮らしたことになる。エドワードにライスイにアリスにもう二人——やれやれ、いっぱいつくつ

たもんだ。彼らみんなに祝福あれ。

ぼくも自分なりにけんめいに働いてはきた。激烈な苦悩というものは、労働にひとしいから、お昼前に酔っ払うこともしよっちゅうだ。戦争から帰ってきてまもなく（戦闘勤務には年をとりすぎていたが、行かずにいられるものじゃない。ワシントンへ乗りこんでいって、大いにせっついて、ついに戦闘に加わることができた）、フランシスとは離婚した。VEデー（ヨーロッパ戦争記念日一九四五年五月八日）のあとの話だ。そんなまえたつたかな。いや、一九四八年だったと思う。ともかく、フランシスは今はスイスに、子供一人と住んでいる。子供を連れていって、どうするつもりかわからんが、とにかく一人連れていった。まあ、どちらでも構わんことだ。元氣にやってほしい。

この離婚はうれしかった。人生再出発ということになった。新しい女房はすでに選んであつて、まもなく結婚した。リリーという名前だ（旧姓はシモンズ）。双子の男の子が生まれた。

さて、万事ごちやごちやしてくる——リリーには、難儀な目にあわせた、フランシス以上だ。フランシスは控え目な女だから、助かっていたのだが、リリーは、まともにあおりをくう。あるいは、生活が前よりよくなつて、かえってぼくがおかしくなつたのか。悪い生活が性に合っている男なのだ。フランシスは、ぼくのやつてること

が気に入らないと——これはしょっちゅうだったが、顔をそむけてしまった。いわばシェレーの月みたいに、友もなくさすらうわけだ。リリーはそうじゃない。ぼくは、人前でリリーにどなるし、うちでも毒づいている。いつかうちの農場の近くの飲み屋で喧嘩始めて、騎馬警官たちに押しこめられてしまったことがある。彼ら全部を相手どつてやると言いだし、ぼくが土地の名士というのでなかったら、すっかりのされていたに違いない。リリーが来て、保釈にしてくれた。また、うちの豚一頭のとて兵隊帰りの男と喧嘩したし、国道七号で、除雪車の運転手に、道をどけと言われてやりあった。また、二年ほど前には、酔っ払ってトラクターからころげ落ち、轢かれて足を折った。何ヵ月も松葉杖を使い、前を横切る奴は、人間だろうと獣だろうと、ひっぱたいていたので、リリーはひどい目にあつた。蹴球の選手みたいな図体をして、顔色はジブシーなみ、これが罵り、どなり、齒をむき出し、首を振り立てる——みんな道をよけてくれるのは当然だ。だが、それだけではすまぬのだ。

たとえば、リリーがお客をもてなしているところへ、ぼくが汚れたギブスに、分厚い靴下のままではいつてゆく。上に着ているものといえ、真つ赤なビロードのガウン、これはフランスが離婚してほしいと言いだしたとき、お祝い気分で、パリのスルカの店で買いこんだも

のだ。おまけに、頭には真つ赤な毛の鳥打帽をかぶっている。で、鼻とひげを手で拭^{ぬぐ}つてから、客たちと握手して、「ヘンダソンです、初めまして」と言う。それから、リリーのところへ行つて、まるでお客みたいに、他の連中と同じように初めてのお客なみの握手をしてしまった。そのうへ「初めまして」と言ったのだから、婦人連はきつと、こう陰口をたたいたに違いない。「知らないひとみたいじゃない。心の中で、前のひとを忘れかねているのね。ひどい話じゃないこと？」消えざる貞節を想像して、ぞくぞくとしてくるわけだ。

だが、連中の考えは、大間違ひ。リリーにはわかつているが、これはわざとやったことで、やがて二人だけになると、リリーが叫びだす。「ジーン、いったい何のこと？ 何をやらかそうつていうのよ？」

ビロードのバスローブに真つ赤な編み紐のベルトをしめ、尻を突き出し、ギブスの足で床をこすりながら、立ちほだかり、頭を振り立てて、「ちゅ、ちゅ、ちゅ」と言つてやる。

というのも、この重々しいギブス姿で、病院からもどつてきたときに、リリーが電話でこう言っているのが聞こえたのだ。「また、たぐの例の怪我^{けが}なんですの。怪我は、しょっちゅうですわ、でも、まるで丈夫なんですから。殺しても死なない人ですわ」殺しても死なぬ！ こ

れはまたどうだ。こいつめ、と思つたのだ。

リリーは、冗談のつもりで、言つたのかもしれない。

電話で冗談を言うのが大好きな女だ。大柄で、活発な女で、顔立ちも優しい。性格のほうも、まずは顔立ちにふさわしい。楽しいときもあったのだ。楽しいって言えば、とびきり一番のは、リリーの妊娠中、それもだいたい進んでからのことだ。眠るまえに、リリーのお腹に出てきたしみに、ベビー・オイルを塗つてやつた。乳頭は桃色からつやを帯びた褐色に変わり、お腹の赤ん坊が動いて、丸い形が変わつたりする。

軽くすりこむようにして、大きな無骨な指で、少しでも傷をつけないように、念をいれた。で、灯りを消す前に、指のオイルは髪になすりつけ、二人でお休みのキスをかわして、ベビー・オイルの匂いの中で眠りにつく。

だがあとになると、また戦闘状態とあいなつて、「殺しても死なぬ」というのを聞いたときは、わざと敵意ある解釈を下した、そんなことは間違いと気づいていたのだが。いや、お客の前で他人みたいに扱つたというのは、リリーがお行儀よく、一家の主婦らしく振舞つているのが気に入らなかつたのだ。この有名な一家、一族の唯一の相続人たるべくが、浮浪者なみなら、リリーも令夫人なんてもんじゃなく、ただの女房でたくさんだ。

冬になると、ぼくがいつそうひどくなるもんだから、

リリーはフロリダのホテルに出かけて、釣りでもおやりになつたら、と言いだした。ある思慮深い友人が、双子の坊主たちのめいめいにブライウッド製の石投げ器をくれたことがあり、スツーカースの中身を出したときに、そいつが目について、たちまちこりはじめた。釣りもやめてしまい、砂浜にすわりこんで、瓶ばかり撃つていた。そこで、こんなことを言いだす連中もいただろう。「何分、あのでかいでぶちゃん、ばかでかい鼻の下にひげまで生やしている男。あいつの曾祖父は国務長官で、曾祖父には駐英大使に駐仏大使、父親は有名な学者のウィラード・ヘンダソンで『アルビ派』(十二、三世紀南仏のアルビ教徒の団)に関する名著を書いている。ウィリアム・ジェイムズ、ヘンリー・アダムズなどの友人だつたが」言わなかつたかしらん。いや、いや、言つてたとも。なにしろ、優しい心配そうな顔つきの二度目の妻君、これまた六フット近い大女に双子の坊主をひき連れて、避寒中なのだ。食堂では朝のコーヒーに、大きなフラスコからパーボン・ウイスキーをそそぎこみ、浜辺では瓶ばかり撃ち割っている。ほかのお客が、割れた瓶のことで支配人に文句を言い、支配人がまたリリーに談じこんだ。私に面と向かつて言おうとはしなかつた。優雅なるモデルで、ユダヤ人はお断わり、そこで、このべく、E・H・ヘンダソンに閉口したのだ。子供たちまでうちの坊主たちと

は遊ばなくなり、妻君連中はリリーを避けだした。

リリーは、ぼくを説得しようとした。自分たちの部屋にいて、水泳パンツ姿のぼくに、石投げ器や瓶のかげらのこと、ほかのお客に対するぼくの態度などの問題を切り出した。リリーは、たいへん頭のいい女だ。叱りつけたりなどはしないで、お説教をやる。お説教に夢中になる癖があり、そうなるとうしろになって、声をひそめて、しゃべりだす。という理由は、ぼくがこわいからではなく、彼女自身の心の中に危機感をまねくせいだ。

が、ぼくと議論をしてみても、どうにもなるものではないから、しまいに泣きだす。ぼくは涙を見ると、かっとなるたちで、「よおし、おれの頭を撃ちとばしてみせるぞ。ピストル自殺だ。ちゃんと忘れずに持って来ている。今、ここに持つてゐるんだぞ！」とどなってしまふ。「ああ、ジーン」リリーは叫んで、両手で顔をおおって、逃げ出してゆく。その訳はこうなんだ。

二

というのは、リリーの父親は、まさにこんなふうで、ピストル自殺をやらかしたのだ。

リリーとぼくをつなぐぎずなの一つは、二人とも歯が悪いという点である。リリーは、二十も年下なのだが、二人ともブリッジをつけている。ぼくのは脇のほうで、

彼女のは前のほうだ。リリーは、上の門歯四本がない。まだ高校の時分、彼女の尊敬していた父親とゴルフをやっていたときの出来事だ。親父さんは飲兵衛で、その日もゴルフへ出られないぐらいに酔っていた。振り返りもせねば合図もせずに、最初のティーで打ちはじめ、バックスイングで、娘をひっぱたいてしまった。あの暑い七月のゴルフコースを思い浮かべ、水道用品を商^{あきな}つているこの飲兵衛と、十五歳の女の子が血を流していたところを思うたびに、やりきれない。あの弱虫の飲兵衛どもめ！あの腰抜けどもめ！あの道化^{どうぢ}どもときたら、酔っ払って元気がつくと、このこ人前に出ていって午前のかいかにも打ちしおれた様を見せびらかすのだから、やりきれん。でも、リリーは、父親の悪口にはいっさい耳もかさず、自分のことより、まず父親を思って泣きだすのだ。いつも、父親の写真を財布の中に入れて、持ち歩いている。

リリーの親父には、会ったことはなかった。リリーと知り合ったのが、もう死後十年か十二年たったあとだ。父親の死後まもなく、リリーは、かなり地位もいい、ボルチモアの男と結婚したという話だ——もっとも、考えてみると、その話をしたのはリリーご自身だが、ともかく、二人はうまが合わず、戦争中に離婚した（そのころ、ぼくはイタリアで戦っていた）。ぼくらが知り会ったこ

ろは、リリーは家にもどつて母親と暮らしていた。この一家は、ダンベリー（コネチカッ、ト州の町）、例の帽子屋さんの町の出身だ。ある冬の一日、二夫婦でいっしょにダンベリーのパーティーに出かけることになったが、フランシスはあまり気が進まぬという。ヨーロッパのインテリ君と手紙のやりとりをしていたせいだ。フランシスは、深刻派の読書家で、熱烈な手紙を書き、さかんに煙草をのむ。彼女が哲学熱かなんかにとりつかれたとなると、めつたに顔も合わせなくなる。部屋に閉じこもつて、ソプラニの煙草をふかし、咳せきこんでは、せつせと何か書きとめているわけだ。そのパーティーに出かけたときは、まさにこの種の精神的危機の一つで、パーティーの最中に、何か即座にやらねばならぬことを思い出し、そこで、ぼくのこともすっかり忘れて、車で帰ってしまった。さて、その晩は、ぼくのほうもこんぐらかつていて、行つてみると、黒い蝶ネクタイなんぞ締めこんでいるのは、ぼく一人という有様。服の色は、ミッドナイト・ブルー（赤みがかつた）。ブルーのタキシードなんて、この地方では、ぼくが皮切りだったに違いない。で、このブルーの生地を丸一エーカー分も着こんでいるような気がしたものが、十分ほど前に紹介されたばかりのリリーのほうは、赤とグリーンのクリスマス縞のドレス、この二人がしやべつていたのだ。

事の次第に気がついたリリーは、もう引きあげようと言ひ、ぼくも「オーケー」と言つた。雪を踏んで、彼女の車に乗りこむ。

きらきら煌きらめくような晩で、雪がきゅんときしむ。彼女の車は、丘の上に駐車してあつたが、三百ヤードほどの長さの、鉄みたいにつるつるの丘だ。車が動いたかと思つたとたん、横すべりしだして、度を失つたリリーは、「ユージーン！」と叫んで、ぼくに抱きついてきた。丘の上にも、雪をかきわけた歩道にも、見渡すかぎり、あたりに人はつ子ひとり見当たらぬ。車は完全に一回転してしまつた。リリーは、短い毛皮の袖から突き出たむき出しの腕で、ぼくの頭をかかえたまま、大きな目で窓ガラスの外を見つめ、白々と凍りついた雪の上を滑つてゆくままだまかせていた。ギヤも入れてなく、ぼくはキーに手をやって、エンジンを切つた。吹きだまりに突っこんでいたが、たいして深くはない。ぼくがハンドルをとる。月光が冴え返っている。

「ぼくの名前、どうして知つてた？」ぼくが言ふと、「あら、知らぬ人なしだわ、あなたがユージーン・ヘンダソンってことは」と言う。

もう少ししやべつたあと、リリーは言う。「あなたは離婚すべきだわ」

ぼくは言つてやった。「何を言つてゐるんだ、いった

い？ そんなこと、言っていいんかい。こっちは、きみの父親ぐらいの年齢だぜ」

それっきりで、夏まで会わなかった。こんどはリリーは買物中で、白いピケ地（太いうね織りの綿布）の洋服に帽子、白い靴をはいていた。雨が降りそうで、こういう格好で雨に会っては困ると思った彼女は（もともと、もうすでに汚れが目につきはしたが）、車で送っていただけに少し、と言った。ぼくは、納屋のための材木を買いにダンベリーへ行ってきたところで、ステーションワゴンに材木をいっぱい積んでいた。リリーの指図で、彼女の家のほうへ走り出したのだが、リリーは気を配まかせさせて道を間違えてしまった。ひどく美人に見えたが、妙に昂もたぶっている。蒸し暑かった天気は、やがて雨に変わった。リリーが右折と言い、右へ曲がると、灰色の円錐形になった塀で、中は石切場のあとに水が溜ためめてある——塀が白と目にうつった。リリーは大声で叫びだした。「あら、引き返してよ！ いそいで回るのよ！ まるで道がわからないわ、帰らなきゃいけないのに」

結局たどりついたが、小さな家で、嵐がやってこようという直前の、暑い大気がむんともっていた。

「母がブリッジに出かけてるの」リリーは言った。「母に電話して、帰らないように言わなくっちゃ。電話は私の寝室なので」ぼくもついていった。念のために言っと

くが、リリーは、だらしないうところ、放縦なところなんて全然ない女だ。着物を脱ぐと、リリーは震え声で急に言いだした。「愛してる！ 愛してるのよ」で、抱き合いながら、ぼくは自分につぶやいたものだ。「え、そんなはずが？ この女が、お前さんを愛してるなんて」ばかりでかい雷がたてつづけに鳴りひびき、たたきつけるような雨が、屋根に、通りに、日除け幕に落ちかかり、稲妻も閃ひらいた。すべてが水びたしになり、目がくらんだ。が、嵐の暖かい闇に包まれてシートに横たわっていると、焼きたてのパンのような、暖かい匂いがリリーから立ちのぼった。初めからしまいで、彼女は「愛してる！」と言いつめだった。じつと抱き合っていると、日が差しもせぬまま、いつか夕方だった。

リリーの母親は居間で待っていた。ぼくは、ちょっといやな気がした。リリーは電話で「しばらく帰ってこないで」と言った。そこで、母親は、ブリッジの会が終わるやいなや、何年来というひどい夏の嵐について、馳はせもどってきたのだ。いや、こんなのは、いやだ。このお婆さんがこわかったというのじゃない。ぼくには手の内が読めた。リリーは、わざと見つかるように、仕組んだのだ。ぼくが先に降りてゆくと、ソファアのそばに灯りが見えた。階段を降りきったところで、お婆さんと面と向かいあうと「ヘンダソンです」と、ぼくは名乗った。

太ったきれいなひとで、ブリッジの会向けに、陶器の人形みたいなお化粧をしていた。帽子もかぶったままで腰かけると、太った膝もとに、エナメル革のハンドバッグを置いた。心の中で、リリーを強く非難しているのが、わかった。「わたしの家で。妻子もある男を相手に云々」というわけだ。こちらは、委細構わず居間に腰をおろした。ひげものびているし、材木を積んだステーションワゴンも外に置きっぱなしだ。リリーの匂い、あの焼きたてのパンみたいな匂いは、ぼくにもしみついていたに違いない。やがて、リリーが、いかにも冴え冴えとした表情で降りてきた、母親に自分のやりとげたことを見せびらかしてもするように。ぼくは、素知らぬふりで、大きな長靴をはいた足を絨毯の上にぐっと開いて投げ出し、時折り顎ひげをひねっていた。二人の間に、ぼくは、リリーの父親のシモンズの、水道器具の卸し業者で自殺をしたという人物の大いなる影を感じとらざるをえなかった。事実、彼はリリーの寝室の隣の、この家の中心の寝室で自殺したのだ。リリーに言わせると、この自殺は母親に責任があるという。じゃ、このぼくは、どうなるんだ、リリーの憤慨の道具でもあるのか。「いや、いや、違うさ」ぼくは、ひとり言をつぶやく。「そうはいかん。こんなことには、かかわるなかれさ」

母親も、一応無礼な様子は見せないつもりらしかった。

おうように振舞い、リリーの上手に出ようとした。それとも、これが身についた態度なのか。ともかく、堂々たるレディーぶりに見えたが、ふと我慢しきれなくなったらしく、こう言いだした。「お宅のご子息にお目にかかりましたよ」

「へええ、やせたほうですか、エドワードかな？ 赤いMGを運転してますが。ダンベリーの界限にときどき出かけますから」

まもなく引きあげてきたのだが、リリーには、こう言ってきた。「きみは、ご立派に一人前のお嬢ちゃまだが、母親にあんな仕打ちはよろしくないぜ」

太った老婦人は、ソファァにすわり膝もとに手を握りしめていたが、眉毛の下目の目もとに、涙のせいか、心痛のせいか、筋がついて見えた。

「さよなら、ユージーン」リリーは言った。

「じゃ、ミス・シモンズ」とぼく。

少し気まずい別れ方だった。

が、まもなく、また会うことになったのだが、こんどはニューヨークでだ。というのは、リリーは母親と別れて、ダンベリーから離れ、ハドスン通りのお湯も出ないアパート、飲んだくれ連中が、階段に戸外の寒さを避けてたむろしているようなアパートに住んでいた。大男のぼくが、日焼け、酒焼けの面構えで、黄いろい豚皮の手

袋をはめて、この階段にのっそりと、突っ立つと、心の声がたえまなくこう言いづけるのだ——シタイ、シタイ、オレハシタイゾー——ソウトモ、行クガヨイ、ぼくは自分に言いきかせた、進メ、進メ、進メ！と。で、階段を上がっていったのだが、厚手のむくむくの上着、豚皮の手袋、豚皮の靴、ポケットには豚皮の財布を突っこみ、欲情にわき返り、事あれかしの氣にわき立って、リリーが戸をあけて待っている最上階の手すりのあたりを見上げるぼくの目が、ぎらぎら光っていることには、氣づいてもいたのだ。リリーの顔は丸く、白く、豊かで、澄んだ目を細めて、ぼくを見つめた。

「冗談じゃないよ、こんなに、部屋に住むなんて。もうここだって、臭ってるぞ」ぼくは言った。このアパートでは、トイレが廊下であり、水を流すチェーンの引きづなは青くさび、扉には深紫色のガラスがはめてあった。

リリーは、スラム街の人々、とくに老人や母親たちが好きだった。生活補助を受けながらもテレビは持つという彼らの氣持もわかる、と言った。連中の牛乳やバターを冷蔵庫に入れてやり、社会保障の書類も代わりに書いてやった。リリーとしては、こうした移民やイタリア人たちに尽くしてやって、アメリカ人の良さを示している、と思ひこんでいたらしい。だが、心から手助けするつもりで、例の衝動的な顔つきでやたらとかけまわっては、

辻褄の合わぬことをしゃべりちらしていたのだ。

この建物の臭氣は、顔につかみかかってくる感じで、階段を上がりながら、ぼくは言った。「ひえつ、調子がおかしくなったぞ！」

てっぺんの、リリーの部屋にはいる。ここも汚なかったが、少なくともここには灯りがある。二人で腰をおろすと、リリーが言いだした。「これからの生涯を、空しく浪費なさるおつもり？」

フランシスとは、どうにもならぬところに来ていた。復員してきてから、二人の間に、親身に氣持が通じたというのは、ただの一度きりで、その後は、全くのお手上げ、で、ぼくも、いわば放任の形だった。ただ一度、ある朝、台所で口をきき合ったが、これで、二人の間はすっかりおしまいになった。ほんの数語だけ。こんな具合の会話だった。

「で、こんどは何をなさるおつもり？」

（ぼくは、当時、農場に興味を失いかけていた）

「さあね、もう遅すぎるかもしれないが、お医者はどうかな、と思ってるんだ——医学校にはいれれば」

フランシスは、ふだん陰気で無表情とまではいわないが、真面目くさった口を大きく開いて、ぼくを嘲笑した。嘲り笑う彼女の顔に見えるのは、ただ暗い、開いた口ばかり、齒さえも見えなかった。これは奇妙な話で、彼女

にもちゃんと歯が、白い歯があるのだから。いったい、どうしたのか？

「わかった、わかった、わかったよ」

そこで、リリーのフランス語評は、まさしくそのとおり、とぼくにもわかった。ところが、そのあとが、うまく続かなかった。

「私は子供が欲しいのよ。もう長くは待てないの」リリーは言った。「じきに三十ですもの」

「ぼくの責任かね？ いったい、どうしたんだ」

「私たちは、いっしょになるべきだわ」

「だれがそう言うんだ」

「いっしょにならなかつたら、二人とも死んでしまうわ」

一年かそこらたったが、ぼくはまだリリーの言い分どおりに踏み切りかねていた。そんなに簡単に事が運ぶとは思えなかつたのだ。で、彼女は不意にニュージャージー出身の、ハザードというブローカーの男と結婚してしまった。考えてみると、リリーが二、三度この男のことを口にした覚えがあるが、ぼくのほうでは、ただのおどしと思ひこんでいた。というのは、リリーは、なかなかのおどし屋だった。とにかく、彼女はその男と結婚した。リリーとしては、二度目の結婚だ。で、ぼくのほうは、フランスと娘二人を連れて、ヨーロッパ、つまりフラ

ンスに一年間出かけた。

ぼくは子供のころ、数年間、南フランスのアルビという町の近くで暮らした、親父がここで研究にいそんでいたのだ。五十年前のこと、ぼくは、通りの向かい側の子供をよくからかったものだ。「フランソワ、おいフランソワ、お前の妹は糞づまりだぞ」と。父は大男で、がつしりと、しかも身ぎれいにしていた。長い下着は、アイルランド製のキャラコで、帽子入れは赤いビロードの縞がついていて、靴は英国に、手袋はローマの「ヴィターレ・ミラノ」の店に注文していた。バイオリンもかなりうまかつた。母はアルビの煉瓦作りの聖堂で、よく詩を書いていた。母のおはこは、パリから出たいへん気取り屋の婦人の話だった。教会の狭い廊下で、その人と出会う。と、その婦人が言うには「あなた、通させていだいてもようございますこと？」で、母は答える。

「ええ、奥様、通させていただかせてさし上げますわ」母は、この笑い話を、だれにでも話して聞かせ、何年もの間、ときには笑いだしながら、ときには小声で「通させていただかせてさし上げますわ」と言いつづけたものだった。去年の雪、いまいずこ。融けて、流れて、消え失せた。

が、ぼくはフランスと娘たちを連れて、アルビに行きはしなかった。フランスは、ありとあらゆる哲学者